

2021年2月21日(主日)

主日礼拝

《礼拝》

礼拝讃美歌⇒214番(旧 92番)『主よ、君の愛は限りもなく』

聖書⇒イザヤ 53:4~8

礼拝讃美歌⇒112番(旧 189番)『血潮滴る主のみかしら』

聖書⇒マタイ 27:45~52

礼拝讃美歌⇒116番(旧 40番)『カルバリの丘うち眺むれば』

《パン裂き》

マルコ 14:22~25

礼拝讃美歌⇒146番(旧 61番)『小羊の血にて』

《建徳》

聖書⇒ヨハネ 20:30、31

⇒ヨハネ 15:13

⇒ローマ 5:8

礼拝讃美歌⇒355番(旧 304番)『主はいのちを我に与え』

《建徳要旨》

ヨハネ20章31節：これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシア(救い主)であると信じるためであり、また、信じてイエスの名により(永遠の)命を受け
るためである。

福音書が4つあるのは、マタイはユダヤ人宛に、マルコはローマ人宛に、ルカはギリシャ人宛に、即ち、すべての人に宛てられています。執筆目的は冒頭の聖句の通りです。主イエスの十字架と復活はAD30年のこと。福音書はすぐには書かれませんでした。その必要がなかったからです。しかし30年後、使徒たちが殉教などで生きた証人が召されるにつれ、主イエスの福音を文書に残す必要が出て来ました。四福音書を読んで気づくのは、十字架に関する記述の多さです。どのようにして主イエスは呪われた十字架で惨めな死を遂げら

れたのか、その時、弟子たちはどうしたか。皆、主を見捨てて逃げたことが正直に書かれています。ユダの裏切りとペトロの否認もありました。にもかかわらず主は、そんな者たちのために十字架で死なれたのです。その時は理解できなかったことが、聖霊を受けて、その愛がしみじみと分かりました。それから弟子たちは、旧約聖書を主の死と復活の視点で読み直しました。そして、圧倒的な主の愛に包まれたのです。「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」(ヨハネ15章13節)。更に、「しかしわたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました」(ローマ5章8節)。これは驚きを超えた。

弟子たちは礼拝に集まるたび、主の御死とその愛を語り合いました。そこには感恩の念と、自らの罪深さと悔い改めそして、罪が赦された喜び。それらが混然となって、熱い思いとなって礼拝の場に満ち溢れていたに違いありません。熱気です。私たちキリスト同信会の初代、明治期の礼拝もそれと似ていた、と思われます。

ヨハネは100歳近くまで生かされ、主から受けた命に支えられ既にあった3つの福音書を踏まえた上で、キリストへの信仰と永遠の命のために福音書を書いたのです。(K・H)